
ふるさと資源化の新展開

New Development of Hometown Recycling

山下裕作

YAMASHITA Yusaku

はじめに

- ① 日本文化と民俗文化
- ② 限界集落論と農村の実態
- ③ 文化資源化の新たな展開

おわりに

【論文要旨】

現在民俗学においては「文化の資源化」、「ふるさとの資源化」について盛んに議論されている。そこでは主に行政主導の地域振興事業や文化事業への批判的議論が主流をしめ、民俗学の「本質主義」的側面がそうした行政の事業施策に寄与したのだという学への批判が展開される。しかし、これらの議論は、地域の生活者が抱える卑近で切実な問題から目を背けたまま行われているように見える。本稿は、農村が直面する大きな問題として「限界集落」の問題を取り上げ、民俗文化的知見を活かしながらその解決を図る現場の実践を、鳥根県大田市大代町、新潟県十日町市松代町の二つの事例から分析する。従来の議論が官製の資源化に対する批判に留まっているのに対し、資源化の過程を見ながら、その新しい意味を問い直す試みである。そのうえで、民俗学が提起しうる健全な資源化の方法論の構築を企て、岩手県下閉伊郡岩泉町の現場で実践した試みの顛末を紹介する。いずれも大きな課題であり、未だ検討途上の域を出ない中途半端な検討ではあるが、現在のやや一方的な「資源化」批判の議論に一石を投じることとなれば幸いである。

【キーワード】 水田、ふるさと、資源化、限界集落、民俗学